

キンシャチの内部構造の観察会の実施とその後について

濱谷修一・信太千帆・永井親雄

サボテンの茎内部の様子がどうなっているのか、非常に興味深い内容である。それを見るために、「サボテンの秘密を見てみよう 内部構造の観察会」と題し、平成 17 年 7 月 31 日に、鉢植えのキンシャチ (*Echinocactus grusonii* Hildm.) を切断し、中の様子を見るという観察会を催した。

観察材料には最大部の直径約 30cm、推定樹齢 30 年の 2 株を使用した。1 株は平成 17 年 4 月中旬から水やりを中止し、もう一株は定期的に水を与えつづけた。

当日は 35 名の参加があり、夏休みということもあって、子どもの姿も見えた。

実際に切ってみると、髓の太さが異なり、実際の

樹齢には差があったと思われたが、水やりを中止した株はひだが深くなっており、茎内部の貯水組織の役割について視覚的に理解をすることができた。また、多くの参加者が切り口を指で触ってみたり、強く押してみたり、指についた汁をなめてみたり、思い思いに体験していた。

切った株は根に近いほう(下部)はそのまま展示、先(上部)のほうは 3 日後に挿し木した。水管理は、それまで水を与えていなかったものは与えず、定期的に与えていたものは引き続き与えるようにした。

下部のパーツのその後であるが、切り口の乾燥に伴い貯水部分が陥没、水やりを定期的に行っていたほうの株で症状が著しかった。茎表面の色も悪くなり、枯死したため、9 月中旬に両方とも処分した。

上部のパーツは、10 月中旬まで発根は確認できず、切り口から上部に向けて茎の変色も進んでしまったため、処分した。今回切った株が大きな株であること、一年で最も暑い時期の挿し木であることなどから、活着は困難であると予想していたが、予想通りであった。また、サボテンの挿し木を行うときには、切った後陰干しして切り口を乾かした後に挿すのが一般的だが、3 日の陰干しではこの株の切り口を乾かすには不十分だったというのも失敗の理由として考えられる。

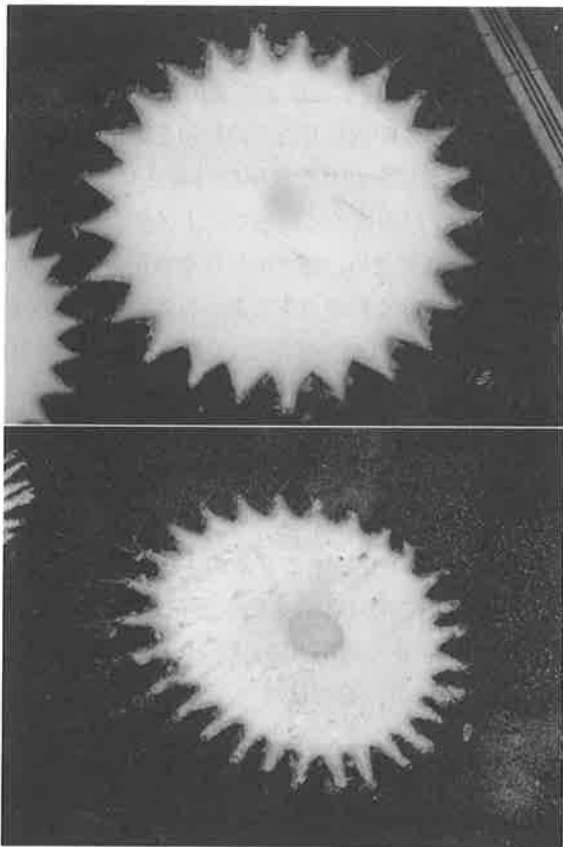


写真 1. 上: 水やり継続、下: 4 月中旬から水やり中止



写真 2. 切った様子